⑳三条大橋の補修・修景

受賞機関　京都市

キーワード　良好な景観の再生、歴史・文化の継承、地域との連携・協働、住民・学識者の参画

全建賞審査委員会の評価ポイント

三条大橋の補修・修景の取組。大学や地元企業等との連携を通じ寄付を集めつつ、住民・学識者等からなる検討会議を経てデザインを決定して歴史ある橋梁の補修を行った点や、文化と歴史を継承する良好な景観を再生した点が評価された。

1. はじめに

三条大橋は、天正18年（1590年）に豊臣秀吉の命により大改修が行われ、現在の形となり、江戸時代には東海道の西の起点に位置付けられるなど、歴史的背景や鴨川と調和した風景など文化的特性をもつ京都を代表する橋梁である。

現在の橋は昭和25年に改築したものであり、木製高欄は昭和49年に更新されたが、長年の風雨により老朽化が著しい状況にあった。

そこで、歴史、風景の継承に向け、木製高欄とともに舗装や防護柵等の更新も併せて実施し、橋梁の健全化と併せて良好な景観の再生を図った。

2. 事業の概要及び成果

1）文化と歴史の継承

景観の再生に当たっては、三条大橋の美しい風景を再生するだけでなく、木の文化や歴史を次世代に継承するため、木製高欄や桁隠しについては、市内産のヒノキを用いて元の形を忠実に復元するとともに、天正18年当時のものが残っているとされる擬宝珠は、再利用を行った。

更新した木製高欄と桁隠し

2）地域住民・企業等との連携・協働

本市では、約2,900橋の橋梁を管理し、これらの耐震補強と老朽化修繕を計画的に進めている。そこで、本事業を他の橋の修繕等に影響のないよう円滑に進めるため、目標額を１億円とし、寄付による支援を募集することとした。

寄付の募集に際しては、地域住民・大学・企業など多くの団体が趣旨にご賛同いただき、関連商品の販売や事業の認知度向上をゼミの研究テーマとして活動いただくなど、様々な形で事業PRにご協力をいただいた。

その結果、全国の多くの方々から寄付をいただき、目標額を上回る額となった。また、高欄の材料についても、一部寄付をいただいた。

3）住民・学識者の参画

更新する舗装や防護柵は、京都にふさわしく、周囲の景観や木製高欄とも調和するデザインとするため、デザイン検討会議を設置し、地元自治会や地元商店街のメンバー、市民公募委員及び学識者から意見をいただくこととした。

デザイン検討会議での活発な議論を経て、伝統文化として脈々と引き継がれてきた和柄と伝統色を採用したデザインを決定した。

和柄や伝統色を採用したデザイン

3. おわりに

本事業は、計画段階から工事実施段階まで、地域・大学・企業など多くの方々のご協力や全国の多くの方々からのご支援により完成することができた。皆様からのご厚意に感謝し、半世紀ぶりに美しく再生した三条大橋を、これからも大切に未来へ継承していく。